創刊

小さいからこそできること。
人と人、島と都市をつなぐ読みもの。

Small Story

in Kamijima

かみじま発　スモールストーリー

小さいからこそできること。 人と人、島と都市をつなぐ読みもの。

Nov. 2011
Vol.1

Small Story in Kamijima

2011年10月。高濱神社の秋祭りを事業所の庭から眺める『ふくふくの会』のみなさん。

「島で生き抜く」ということ。

瀬戸内海の真ん中に位置し、25の島々からなる離島の町、上島町。この町には、人口7,487人、3,818世帯の人々の暮らしがある。そのうち、39.5％は65歳以上の高齢者である。

NPO法人『ふくふくの会』は、「よく生き、よく死ねる、地域社会をつくる」という活動理念のもと、小規模多機能ホームの運営など、上島町弓削地区を中心に、地域に根差した福祉サービスを行っている。

どのようにして最期の時を迎え、そしてそれをどう見守るか。生を全うするということはどういうことなのか。「老い」、「死」というテーマは、私たちが人生をより善く生きる上で、最も重要なテーマであるにもかかわらず、日常生活では目を背けてしまいがちな話題でもある。

瀬戸内の小さな島で、日々その現実に向き合っている人がいる。『ふくふくの会』代表の竹林健二さんに活動に対する想いを語ってもらった。

お話をきかせてくれた人

特定非営利活動法人
ふくふくの会　代表

竹林 健二さん（38歳）

1973年弓削島生まれ、弓削島育ち。大学進学を機に上京するが中退し、帰郷。その後、旧弓削町役場にて福祉担当となったことをきっかけに、お年寄りに関わるボランティア、事業に取り組むようになる。2005年、NPO法人『ふくふくの会』を設立し、地域に密着した福祉サービスの提供を行っている。妻、子ども2人（6歳の女の子、3歳の男の子）の4人家族。好きな食べ物は白飯。

「第1回目がこんな重い感じでいいんですか」、「普段こんな話はしないんですよ」と言いながら、にこやかにお話してくださった竹林さん。

はじまりは、「たまたま」だった

―現在のおシゴトを始めたきっかけを教えてください。

いろいろあって東京の大学を中退した後、平成5年より約9年間、旧弓削町役場で福祉担当をしていました。平成14年に退職の後、「お年寄りに関わる事業がしたい」と思い、最初はボランティアから始め、合資会社、NPOと形態を変えながら、現在に至るという感じです。

―なぜ「お年寄り」だったのでしょうか？

正直、大学を辞めて、こちら（弓削）に帰ってきたときに、働くところがなかったんですよ。たまたま、役場が募集をしていたんです。僕は、最初働く気はなかったんです。「老人」とか、あんまりよくわからなかったですしね・・・（笑）。

でも、親が「申し込んでおいたぞ」って、勝手に申込みしていて、面接に行かなければならなくなって。それで、勤め始めたという感じで、最初は特に、「老人のことをやりたい！」という強い気持ちはこれっぽっちもなかったんですよ。

親のメンツもあるから、1年くらい続ければいいかなと思いながら働いていたんですけど、やっていると責任が生まれてきましてね。分かりやすくいうと、お年寄りたちのことが「好きになっていった」、「放っておけなくなった」という感じです。お年寄りたちに救われたこともありましたから。

―役場退職後の経緯を教えてください。

役場にいるときから始めていたことなのですが、まずはニーズの調査ということで、月1回、各地区の集会所で会食会を実施していました。簡単に言えば、お年寄りを20名くらい集めて、一緒におしゃべりしてたんですよ。ちょうどその時期は、介護保険制度が導入されるということで、認定から漏れた元気なお年寄りたちの受け皿になれればなという思いもありました。

お弁当サービスの開始

―ニーズの調査では何がわかったのでしょうか？

ごはんがいるんだと思ったんです。一人暮らしの高齢者のお宅では、やはり食事の確保が心配事なんです。移動販売とか、色々考えたんですけど、手近にできるのはお弁当づくりだということで、一人暮らしの方に週2回程度、約60人の方にボランティア3名でお弁当を配っていました。

役場時代に知り合ったおばあちゃんたちが、「けんちゃん（竹林さん）がなんかやってるんだったら、助けてやろーや」ということで、弁当の注文をしてくれたりもしていました。そういう意味でも、おばあちゃんたちに助けられていましたね。

お年寄りが集まれる、泊まれる場所を

町内の生協などで惣菜コーナーが充実してきたこともあり、弁当サービスは2年ほどで終了しました。続いて、平成15年からは、お年寄りたちが集まれる「寄合所」みたいなところができればいいなと思い、合資会社を設立し、元民宿を使ってデイサービスを開始しました。しかし、いざ始めてみると、行政の公的サービスの対象外となる方や時間外の依頼など、「隙間産業」みたいな感じになってしまったりして、大変だったんですよ。

そのうち今度は、「泊まらしてくれ」という要望がでるようになったんです。家族が冠婚葬祭や介護疲れなどで、ショートステイを利用したいと思っても、そういう場所がなかったので、自然発生的にそういった要望が聞かれるようになりました。

島から離れたくない

お年寄りが島外のサービスを利用して帰ってきたとき、特に認知症を発症している方の場合、精神状態が悪化して帰ってくることが多かったわけです。ただでさえ、環境が変わってしまうということが、病気に悪影響を与えるにも関わらず、島のお年寄りたちは、「島意識」が強いのでなおさらなわけです。この状況を何とかしたいと思い、民家を借りて、宿泊サービスを始めました。平成16年のことでした。

その後、以前は幼稚園だった現在の建物を借りることができ、NPO法人として、ようやく安定して活動できるようになってきたという感じです。

生と死と

「島で死ねる場所をつくる」ということを目指して活動を始めましたが、最初は場所を作ればいいかと思ったのですが、実はそのケアをどうするかということが非常に難しいんですね。

介護技術の最たるものである、ターミナルケア（終末期医療）をきちっとしたいという思いがあります。今まで5例ほど、看取りのケアをさせていただいたのですが、家族の想いや本人の想い、死に対するとらえ方がそれぞれ違うのです。「死んでもらえる場所をつくるんだ」ということは、きれいに聞こえるけど、死体と向き合うってことはなかなか大変です。濡れタオルを持ってこいとかね（笑）。いい意味で、「慣れ」ということも必要なんだと思います。慣れることで、自分中心で考えていたことから、家族の気持ちを考えられるようになると思うからです。

ふくふくの会の今年のテーマ『島で生き抜く』

ふくふくの会ではじめて看取ったのは竹林さんの祖母だった。

自分含めて、その人材育成をどういう風にしていくかというのはとても難しいことですが、「どういう風に死んでもらおうか」ということは常に考えます。

死体をしっかり見るということから始めなければ、生きている方の支援など、到底できませんからね。それに気づかされたのが、ここで亡くなった5人の方の死でした。

事業主としての生き方

―現在、おシゴトをされていて嬉しい瞬間はどういったときですか？

模範的な解答としては、僕の呼びかけにお年寄りが微笑んでくれたときとなるのでしょうが（笑）、少し考えるようになってきて、今は2つありますね。

まず、介護者として、自分の考えた介護技術がうまくいったときです。認知症の方が笑ってくれたり、ベッドからスムーズに移動できたりといったようなことです。

もう一つは、事業主として、職員が楽しそうにしているのを見るときは嬉しいですね。これは、サラリーマンにはない嬉しさです。特に、おばあちゃんたちを絡めた話題のときに、笑いがでるとき、その笑顔を見てほっとします。

―現在、職員はどれくらいいらっしゃるのですか？

16名（うち、男性は4名）です。当初から一緒にやっているメンバーが3名います。気持ち一つでやっているようなところに、少しずつ増えていったメンバーですから、かわいいです。大事にしたいと思っています。

ふくふくの会の事務長兼イベントプランナーだいちゃんこと、山下大樹さん（25歳）。「僕にはない才能がある」と竹林さんの期待も大きい。

「介護がしたい」と正面から言えるようになってきた

今は、日勤が週1か2回、夜勤が週2回という形ですが、本当は毎日でも現場にいたいと思います。とにかく、「介護をしたい」。入浴でも排泄でも食事でも、「介護がしたい」と思います。この歳になってそう思えてきて。最初はちょっと嫌だったんですけどね（笑）。

最初は言えんかったですよ。「ばーちゃんのことが好きなんですよ」とか「好きでやってるんですよ」なんて、言えんかったですよ。でも、ここ3年ぐらいは正攻法でいこうかなと思って、何でやっているんですかと聞かれたら、「高齢者が好きだからです」とか「介護が好きだからです」と言うようになってきました。

若い時って、ファッションでもそうですけど、なんか奇をてらうようなとこあるじゃないですか。でも、35歳くらいから正攻法でいこうと思って。介護についても、真正面から付き合ってみたいと思うようになったんですね。歳かな。

―覚悟が決まったという感じですか？

気持ちのどこかで逃げていたところもあるのかもしれません。でも、人が死ぬ場面を目の当たりにすることで、胆が据わったというか・・・。

結構、死んだ人たちのことを思うんですよ。それが彼女たちにとっての最高の弔いであるし、また彼女たちが今も生きているということでもあると思うのです。そういうことを思いながらやっていると、しっかり向き合わなくてはいけないんだろうと、覚悟が決まったんですかね。

福祉というフィルターを通じたまちづくり

―これからの『ふくふくの会』が目指すところは？

いろいろ考えてはいるのですが、まずきちっとした介護を確立したいです。それがないと何もできませんから。介護事業所として、科学的に根拠のある介護をチームでしていきたいです。情報、技術の共有が必要です。

そしてもう1つは、福祉というフィルターを通じて、町づくりに参画するということです。『島で生き抜く』というスローガンの実現のために、島で死にたいと思ってもらえる町づくりに貢献したいと思います。

―これからどんなことをしたいですか？

この歳になって、あまり多くのことは期待していないんだけれども、「人間として深く成長したい」ということですね。

地位とか名誉とかではなくて、当たり前のことが当たり前にできる。人にやさしくできる。困っている人がいたら、〇〇できる。ということですね。

意外とそういうことができんなるでしょ。そうじゃなくて、当たり前のことが当たり前にできる人間にならなきゃいけないなと思います。

―アツいお話をありがとうございました。

そんなにアツくないですよ。今は、そんなにギアをいれてやる感じではないと思っています。

事業立ち上げの時とかだったら、熱を入れてやるんですけど、今、熱を入れると続かないというのがわかっているから、どちらかというと、ニュートラルでくすぶり続ける感じかなと。来年で10年になりますので、「やるぞ！」というよりは、「面白いからやってみようか」という感じになっています。

Words for tomorrow

今回のインタビューの始まりは、私が聞いた、港でのおばあちゃん同士の世間話。「ボケてまで、生きているのはみっともない」。何ともいえない気持ちになった。生まれ育った島で最期まで生きるということ、それがどういうことかのか。竹林さんの話から、私たちは何を受け取ることができるのだろうか。

寄り添うということ

介護って、結構奥深いんです。

「もう死にたいねぇ。身体も半分動かんなって」と言われたときに、宗教家でも何でもない僕たちは、「支援者」として、「一人の人間」として、その人に何が言えるか、何ができるかということを常に考えています。沈黙することか、何らかの言葉が必要なのか。それは、人によって答えが違うじゃないですか。「人を支える」ということの問いが常にあって、そういうスタンスで考えています。

通院介助で認知症の方を病院にお連れすると、待合所にいるときとかに、「こうなったら終いやねぇ～」と後ろで言われることもあるんですよ。でも、そういう人たちに対して、大上段に構えて、「あなたの考え方は間違っている」とは言えないとこもあると思うんですよね。だって、自分でも何となく「“ボケ”たくないなぁ」と思っているでしょ。

「老い」や「死」といったテーマは、大抵の人が目をそむけたくなるような話だと思います。でも、百パーセント死んでしまうわけです。自分もまだまだ未熟ではあるんですけれども、せめて「人」として死んでいけるように。「モノ」ではなくて。そういう風にしなければいけないと思います。「あんなになったら終いやのう」と言われながら死んでいくのではなくて。

たとえば、部落の問題とか、現にある事実なわけです。でも、人間としてどこか目を背けたい部分ってありますよね。でも、年配の人たちはそういう教育を受けて大きくなった人もいるわけです。私たちが「だめだ」といっても、それは違うんじゃないだろうかと思うんです。

「認知症の方でも、生きる権利がある。人間としての尊厳は保たれるべきである」と言ったところで、そう思うんだからしょうがないんですよ。

「寄り添うケア」と介護の現場ではよく言いますが、寄り添えられないこともありますよね。自分の価値観と全く違うものに出会ったときに、「そう思ったんですね」と、ありのまま受け入れるということは難しいです。けれども、自分の枠に押し込めようとしたり、自分の価値観やこうあってもらいたいという姿を押し付けようとすると、本質的なものが見えないかもしれないですね。よく「受容」、「共感」するって簡単に言うけれど、実はそれは本当に難しいんです。

About him　竹林さんのこと

すきなもの：ガンダム

夜勤の時間つぶしのお相手。事務所には、組み立てたプラモデルがずらりと並ぶ。子どもたちに、お面や段ボールの家を作ってあげることもあるのだとか。

すきなこと：読書

「いろんな方がいらっしゃるので、自分もいろいろな引き出しを持っておかねば」ということで、色々な本を読まれるとのこと。福祉の専門書はもちろん、『国宝入門』、『茶の湯』、『キリスト教入門』など、幅広く読まれるそう。「自分が歩みよっていかなければ、おばあちゃんたちが歩みよってくれることはまずないから、自分が変わらなきゃと思います。」

続いていること：トランペット

1年くらい前から始めたトランペット。飽きっぽいという竹林さんにとっては、奇跡的なことらしい。ある日、認知症のおばあちゃんが、「今日は吹いてくれないの？」と言ってくれたのだそう。「僕がラッパを吹いているということを覚えていてくれたことが嬉しくて。仕事に絡ませれば、飽きっぽい自分でも続くんだなと思いました。」おばあちゃんたちのためには、がんばれる竹林さんなのだ。

すきな場所：ふくふく

一番好きな場所は、ふくふく。ここにいると、落ち着く。帰り際に、おらぶ（叫ぶ）場所としては、鎌田。

すきな食べもの：白飯

調子がいいときは、キムチで3合。細い身体のどこに入るのか、おどろきだ。

click　→→ More about him 竹林さんのブログ

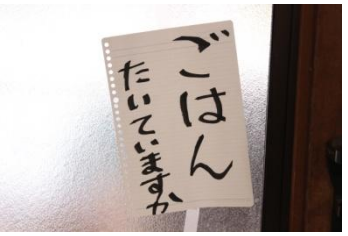
ふくふくレポート

福祉のにおいを消して、「認知症」とか「老い」とかの理解を促していこうという思いで作り始めたふくふくレポート。お年寄りたちの「表情」が伝わってくる。人のにおいや温もりが感じられる素敵な季刊誌だ。

「ストレートに言ったら、嫌う人もおるんですよ。福祉の臭いを消して、認知症や老いの理解を促して行こうという狙いで、『ふくふくレポート』を作りはじめました。少しライトな感じで。じっくり変わっていけばいいんじゃないかなと思って、はじめました。地域の行事におばあちゃんたちをお連れすることもそうです。地域の中に、老いも若きも当たり前にある。老いたら、社会のお荷物になるのではなく、地域の中でいきいきと過ごしてもらいたいと思っています。」

ふくふくな日々

Am8:00



ごはんは炊けたかな？

pm2:00

オイルマッサージ。
きもちよいのだー。

pm5:00

夕ごはん。
きょうのメニューはコロッケ。

大きな口でパクリ。

創刊のことば

一人ひとりが「シゴト」を持って生きる暮らし

島に来て、多くの方にお会いして、一番感じること。それは、とにかくみんな「元気」で、よく笑うということです。「元気」とは、身体が健康であるというだけではなく、心が若く、行動力があるという意味です。

島には、何か困ったことがあったときに、自分たちでどうにかしようという意識が強くあります。「島根性」というのでしょうか。そして、それをできる技術と智恵があります。たとえば、山の草刈、畑仕事、祭りやイベントの準備、グラウンドの整備など、都会であれば、「業者さんに頼まなきゃ・・・」となるところを、みんなができてしまう、できる人がひょっこり現れるということに驚きます。

そういったコミュニティの「シゴト」を誰に頼まれるわけでもなく、島の方々は、とても自然に行っています。

この相互扶助のチカラは、貴重な財産だと思いました。

島のみんなにとっては、こういったことは「当たり前」のことなのかもしれません。だからこそ、記録し、目に見える形にすることに意味があるのではないかと思い、本誌の創刊に至りました。本誌『スモールストーリー』のテーマは、「シゴト」です。シゴトとは、いわゆる職業としての仕事だけではなく、地域を支えるチカラ、能力、智恵のことです。

島国にっぽん。

これからの百年、わたしたちの暮らしはどこに向かうのでしょうか。わたしたちは、どんな社会を創ろうとしているのでしょうか。瀬戸内の小さな島のお話は、きっと都会で暮らす方々にとっても、これからの日本にとっても、より善く生きるためのヒントになるのではないかと思っています。

click

もっと くわしく

かみじまに行ってみよう

かみじまの過ごし方　その1
海辺でぼーっと釣りをする（防寒対策をしっかりと！）
うまい魚とうまい酒を飲む（わたしは釣れたことがありませんが）

広島側からのアクセスの方が便利です。広島空港から車で1時間半。

えらい、こまいなー

About ME

文と写真と編集
ふじまき　みつか

1983年山梨県生まれ。A型。ふたご座。国際基督教大学教養学部国際関係学科専攻。山梨→東小金井→フィンランド→吉祥寺→かみじまちょう

都内マーケティング会社に勤務ののち、2011年10月より、島おこし協力隊として愛媛県越智郡上島町（人口約7500人）の離島に移住。島おこし協力隊として活動中。

好きなもの：ネコ、チーズ、リンゴ、お酒、小川洋子、村上春樹、YUKI、水泳、トレッキング、料理、ものづくり

click
いいね！してください
facebook

協力隊の日々をチェック
blog

かみじまのことば

click

○○まー

【意味】　～ない（否定語）

【使い方】　語尾につける

【用例】
そんなこと、できまー（そんなこと、できないでしょ）
それじゃ、たらまー　（それじゃ、足りないでしょ）

How do you think?
ご感想はFacebookへ　mailでも

Small Story in Kamijima

Vol.1

発行しているひと

島おこし協力隊　上島町弓削総合支所　企画政策課内

藤巻　光加（FUJIMAKI Mitsuka）

メール：fujimaki-mitsuka@town.kamijima.ehime.jp
でんわ：0897-77-2500